

うらかみ 浦上天主堂

爆心地の北東500メートルに位置する浦上天主堂

煉瓦と石材を積み上げ、30年の歳月をかけて1925年に完成した旧天主堂は、東洋一の偉観を誇っていました。

しかし、この大聖堂も原爆によって堂壁・鐘楼の一部を残して倒壊・消失してしまいました。この時、2人の神父と数十人の信者が下敷きとなり、約1万2,000人の信徒のうち、約8,500人が爆死したといわれています。



現在の浦上天主堂



被爆直後の浦上天主堂

被爆直後の浦上天主堂の写真は、その公表が数年間遅らされたそうである。アメリカにいる信者の反感を恐れたためとも言われている。

浦上天主堂しょうろう鐘楼ドーム



現在見られる鐘楼ドーム

天主堂の北を流れる川の脇に、半分埋もれた姿を見せている旧天主堂の鐘楼ドーム。直径5.5メートル、重さ50トン。爆風で約35メートル離れた土手まで吹き飛ばされました。



被爆当時の鐘楼ドーム



聖人の石像は熱線で黒く焦げ、強烈な爆風で鼻や腕をもぎとられ、頭部を欠いた痛々しい姿で立っているものもある。



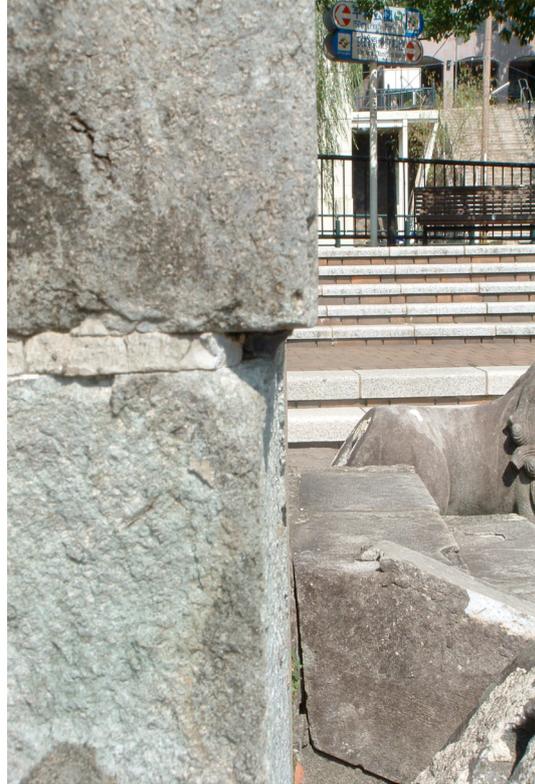
爆心地公園に移設されている残骸の一部

被爆当時の浦上天主堂がそのままの場所に残されていれば、広島原爆ドームに匹敵するほどの大型の遺構として残ったであろうと言われています。当時もそのままの形で残そうとする運動はありましたが、代替地の問題や、当時の信者たちが長い迫害の歴史の残る浦上の地に、被爆前と同じ天主堂を建てたいという強い願いもあって、柱の一部だけが現在の爆心地公園に移設されました。

浦上天主堂の被爆支柱



爆心地公園内に移設されている
被爆した浦上天主堂の支柱



爆風により礎石の部分に生じたずれ

左の写真は、爆心地公園内に設置されている被爆当時の浦上天主堂の支柱です。当時、被爆した天主堂を保存しようという動きはあったものの、新たな天主堂を建設するための代替地の問題や信者が一時も早い天主堂再建を願ったことなどから、この被爆した支柱のみが爆心地公園内に移設されました。

右の写真は、支柱の一部分を拡大して撮影したものです。支柱に使われた石と石のつなぎ目が1 cmほどずれていることが分かります。

原爆によって生じた爆風は、想像を絶するスピードと圧力、熱で爆心付近にあるものを全てを破壊し尽くしました。浦上天主堂も、爆風により建物全体にねじれが生じたといわれています。(爆心と反対の方向にねじれながらずれた)この支柱も至る所に、当時の痕跡を残しています

被爆した支柱は、もの言わぬ証言者として、原爆のすさまじい破壊力を後世に伝えているのです。

原爆「落下」中心碑

爆心地公園の北側に、高さ10mほどの三角形の標柱が設置されています。

1945年8月9日、午前11時2分、この標柱の上空500m付近で、人類史上2番目の原爆が炸裂しました。付近に住む市民の多くが、お昼の準備をしたり昼食をとったりしながら、つかの間の安らぎを感じていた時間帯です。

爆発と同時に発生した火球は、瞬間、摂氏数百万度に達し、体積を急速に膨張させた後、多くの市民の命を巻き込みながら、約10秒後にはその光輝を失いました。

爆発時の超高熱により発生した想像を絶する爆風と熱線が、付近の建物と人を襲い、都市を跡形もなく消失させてしまうまで、3秒足らずの出来事でした。

一面、廃墟と化した浦上の丘において、爆心点は、2つの地点(NCC・長崎文化放送局付近と長崎大学医学部付近)の熱線によって生じた影の向きや樹木・建物倒壊の方向から割り出されました。影をたどったところ、ちょうどこの中心碑のある付近で、直線が交わったのです。(2つの直線が30°で交わったので、現在の中心碑も30°の頂点を持つ三角柱となっています。)

当時、この爆心点はCentreと英語(イギリス英語)で記された木片が無造作にたてられているだけであったそうです。その後、何度かの立て直しを経て、現在の中心碑は1955年に立て替えられたものです。

また、中心碑を円くかこむように、放射状に階段が設けられていますが、これは爆発によって生じた爆風と熱線を表しています。

「落下」ではなく投下

現在、この碑は「原爆落下中心碑」とされていますが、これは、正確な表現ではありません。なぜなら「落下」とはものが自然に落ちることであるからです。原爆は自然がもたらした脅威ではありません。人間によって作り出されたものであり、人間によって「投下」されたものなのです。



爆心地公園内に設けられている中心碑
8月9日、この中心碑の500m上空で
「ファットマン」が炸裂した。

母子像



爆心地公園内に設置されている母子像

1996年、長崎市は被爆50周年記念事業の一環として、爆心地公園の原爆落下中心碑を撤去して、新しいモニュメントを作ると発表しました。制作者は、平和祈念像の制作者である北村西望氏の弟子で、長崎市出身の彫刻家・富永直樹氏。

しかし、行政の突然の制作発表と母子像のイメージがあまりにも原爆の悲惨さや被爆の実態とかけ離れたものであったため、被爆者をはじめ多くの市民が中心碑の撤去とそれにとまなう新モニュメントの設置に反対の声をあげました。行政側は市民の反対運動の盛り上がりで当初の計画を断念し、現在の中心碑は撤去せず、爆心地公園内の一角にこの母子像を設置しました。

その後、母子像の宗教性をめぐり、爆心地公園内からの(母子像の)撤去と制作に伴う費用1億4千7百万円の返還を求めて、伊藤長崎市長を被告に裁判が行われました。

結果的に母子像の撤去とはなりませんでしたが、被爆遺構の保存をめぐる行政の対応と被爆者との意識のずれが顕著にあらわれた事件となりました。

長崎では、新興善小学校の被爆校舍解体をはじめ、被爆の実相を伝える遺構は、多くの市民の反対の声があるにもかかわらず、行政の施策によって次々と姿を消しつつあります。

長崎原爆朝鮮人犠牲者追悼碑



当時、日本は軍需産業の労働力不足を補う目的で、植民地支配していた朝鮮の人たちを強制連行してきました。長崎県下には7万人、長崎市には3万人といわれる朝鮮の人たちは炭坑や造船所、兵器工場、トンネルや防空壕掘りなどに従事させられていました。この追悼碑はこれら朝鮮人・原爆犠牲者追悼のため市民団体の手で建立されました。広島では韓国人の慰霊碑が平和公園の外にあったということで大きな問題になりましたが、長崎でも平和公園の中とはいえ、ひっそりとした端の場所にしか長崎市から土地が提供されていないことに大きな課題や疑問を感じざるをえません。

被爆瓦

被爆瓦というのは、原爆の被害を受けた瓦のことで、普通の瓦との見分け方は、表面がざらざらしている。

そのざらざらは、原爆の高熱を浴びて、瓦中の水分が急激に沸騰し、泡だったものである。ざらざらの粒が大きいほど高熱を浴びた瓦。瓦の中で色が変わっているものは、原爆の熱線を浴びたあと、家屋の家事によりさらに焼けたもの。一枚の瓦の中で、重なっている部分は色が変わっていないところもあるのがよくわかる。

ここには、直接瓦にふれ、熱に強い瓦でさえ原爆の力で変化していることが感じられる。



核廃絶人類不戦の碑

いわゆる捕虜の人たちの被爆の慰霊のためにたてられた。

日本の侵略の事実の認識をきちんと持つこと。なぜ多くの外国人が原爆の被害にあっただかの認識を持つことが大切である。

アジアの国々は日本に原爆が投下されたことで解放された、原爆投下で戦争が終わったという認識である。その認識と核兵器がいいというのは別問題だが、日本もきちんとした歴史認識を持ち、被害だけでなく戦争の加害の歴史もきちんと知った上で核兵器の非人道的さを訴えるべき。

この碑の前では8月15日敗戦、12月8日真珠湾攻撃の日に集会を実施している。



平和の母子像

沖縄のガマの様子をあらわしている。

戦争といえば長崎では原爆を連想するが、戦争は原爆だけでない。沖縄では日本



で唯一地上戦が行われたところである。沖縄でなくなった人たちも、原爆でなくなった人たちもどちらも、戦争の被害者である。悲惨な戦争を二度と繰り返さないようにと願いを込めて多くの人たちの寄付で建てられた像である。

浦上天主堂遺壁

被爆で大きな被害を受けた浦上天主堂が一部移設されて残っている。

もし、そのままの場所(今の浦上天主堂の場所)に残っていれば広島原爆ドームに並ぶ大型の被爆遺構となっていただろう。

カトリックの信者たちは自分たちの教会を早く建て直したかったが、原爆の被害を受けた教会はそのまま残した方が良いという声もあったため、長崎市に代替りの場所はないかとたずねたが、代替りが見つからなかったため被害を受けた天主堂を壊し、今の浦上天主堂を建てた。その時一部の遺壁を爆心地公園に移した。

よく見ると、つなぎ目のあちらこちらが1cmほどずれているのがわかる。

移設するときには細心の注意を払い移したため移動の際にずれたものではない。建物全体が爆風でねじれるようにずれている。



被爆地層



爆心地公園を整備する際に出てきたので一部が残されています。爆風を真上から受けているので家屋が押しつぶされた形になっています。

当時の生活がうかがえる遺品がたくさん埋まっています。人骨もたくさん出土したそうです。

当時、川に沿って家々が立ち並んでいました。爆心地付近は高谷家の別荘があり、原爆中心碑付近は当時としてはめずらしいテニスコートがありました。中心碑の上空約500メートル付近で空中爆発した原子爆弾の爆風は真下の家々を一瞬のうちに押しつぶしました。想像もできない強烈な圧力がかかったために家々はぺちゃんこになり、地層を形づくるにいたりました。その地層の中からは被爆瓦はもちろん炭化した衣服や布団類、茶碗などの日用生活用品、炭化した日記帳や書籍類までがあります。また、人骨もそのままに地中深く眠っています。

山王神社の被爆大楠

一本柱のまま生き残った二の鳥居からやや奥まった山王神社の入り口に、大きな二本の楠があります。樹齢400年とも500年ともいわれ、幹の周りは社殿に向かって右手が8メートル、左手が6メートル、高さは二本とも10メートル以上にもなります。原爆投下後、強烈な熱線とすさまじい爆風のため、幹は大きくさけ、枝葉は吹き飛ばされてしまいました。また、熱線で木の肌は焼かれ、一時は枯れてしまうのではないかと心配されましたが、再び新芽を吹き出しよみがえりました。「70年は草木が生えない」といわれた長崎の街の人々に、戦後の復興への希望と勇気を与えました。



爆風があたった方の幹は裂け、熱線で焼けた後に葉が塗られている

さんのう

山王神社 二の鳥居

爆心地から南東に約800メートル。旧浦上街道沿いの閑静な住宅地に「一本柱鳥居」として有名な山王神社の二の鳥居があります。1924年に建立された鳥居は当初、一の鳥居から四の鳥居までありました。爆風に対して平行に立っていた鳥居は倒れずに、二の鳥居は爆心地側の半分を吹き飛ばされ、半分が不安定なまま立ち続けています。

この鳥居は女性だけの寄付によって建てられました。柱に刻まれた寄進者の名前は爆心地側が熱線で溶けてざらざらになっており、寄付した多くの人たちの名前が消えています。また、鳥居の笠木が動かされ、無言のうちに原爆の威力を伝えています。



一本柱で立ち続ける山王神社二の鳥居



爆風で笠木がずれている

やまざと 山里小学校

山里小学校は、平和公園から歩いて数分の所にあります。1932年に新築された校舎は、3階建ての鉄筋コンクリートで九州一立派だと言われていました。しかし、原爆によって北側の1・2階以外は骨組みを残して燃えてしまいました。

その旧校舎は1988年の夏に解体されました。被爆43周年のこの時期から、ようやく市民の間に「目から消えるものは心からも消える。遺構を残し、平和教育に役立てて」との声が高まってきました。しかし、その被爆体験の風化を憂う市民や被爆者に対し、当時の新聞は、長崎市教育委員会の考えとして「形あるものはいずれ風化する。平和教育の一環として、精神面で継承する方が効果的」と伝えています。校舎は現在新しく建て替えられ、旧校舎の階段の手すりや柱、門柱、防空壕跡などが残っているだけです。

8月9日も先生たちは朝から学校へ出て、子ども達と作っていた田んぼの草取りや防空壕掘に汗を流していました。11時2分、原爆が炸裂しました。防空壕の中で作業をしていた先生が、しばらくして見た外の光景は、地獄絵そのものになっていました。運動場にいた人たちは、一人残らず倒れていました。爆風と熱風によって衣服は焼けて、はがされていきました。むき出しになっていた手足や顔は焼けただれて、ぼろ雑巾のようになった皮がぶらさがっていました。10メートルも吹きとばされ、崖に打ちつけられて即死した人、背中一面が焼けただれて苦しむ人、全身を焼かれて真っ赤に血をにじませ、目がつぶれて舌もかみ切って、手のほどこしようもない人。

この日、学校で作業をしていた職員32人の在校生のうち28人が亡くなりました。当日、児童は登校していませんでしたが、校区が爆心地帯であったため、通学区内には、全焼または倒壊を免れた家屋は一戸もなく、1945年6月30日における在籍児童数1581人のうち、およそ1300人が死亡したと推定されています。



被爆当時の山里小学校



現在の山里小学校



防空壕跡



現在の防空壕跡

あの子らの碑

「あの子らの碑」は、山里小学校の校庭にあります。被爆から4年目の春、生き残った山里小学校の児童たちが、体験し目を見た原爆の悲惨さを作文に書き、永井博士の発案で「原子雲の下に生きて」という本として出版されました。この碑は、その印税で建てられたもので、原爆で死亡した山里小学校の教師や、児童とその両親・兄弟の霊を慰めるとともに、永遠の平和を願っています。また、校門下の坂道には永井博士から寄贈された50本の桜の木が植えられており、「永井桜」として親しまれています。

「あのとき山里小学校にいたもので、助かったのはぼくとおばあさんと田川君と3人だけではないだろうか。おとなの人も先生方もみんなうんどうじょうにいてのびのびと休んでおられ、うんどうじょうでは人でいっぱいにぎやかだった。ぼくはまっさきにごうの一ばんおくへとびこんだ。しばらくしてぼくはぼうくうごうの外へ出てみたら、うんどうじょういちめん人間がまいてあったみたいだった。」

「ぼくは、山里小学校の4年生だ。あの運動場はすっかりかたづいている。運動場に出るたびに、ぼくはあの日のことを思い出す。運動場はなつかしいが、悲しい。お母さんをやいたその所にしゃがんで、その土を指でいじる。土の中にぼうっと、おかあさんの顔がみえてくる。」



「・・・この石碑に敬礼しろ、などと強制するようになったらだめですね。・・・この石の上に子どもたちが乗って遊んでいいじゃないですか。石碑が高かったり、細長かったりすると遊ぶのに危険ですから、ずんぐりして低い危険のない石碑にしてもらいました。長い年月の間には、この石碑が何のために建ったのか、分からなくなるかもしれません。でも、子どもたちは遊びながら、『この石碑の絵は何をしているのだろう。平和っていったいどういうわけだろう。むかし、何千何万の人が原爆で死んだげな、じいちゃんがそう言いよったばい。。』などと話し合うでしょう。建設者の名前だとか年月日とか、そんなものはいっさい書かないほうがいいですね。死んだ兄弟姉妹や子や親をいたむために、そして、平和を求めるためにですね・・・。」

あの子

永井 隆 作詩

一、壁に残った らくがきの

おさない文字の あの子の名

呼んでひそかに 耳すます

ああ

あの子が生きていたならば

二、運動会の スピーカー

きこえる部屋に 出してみる

テーブル切ったる ユニフォーム

ああ

あの子が生きていたならば

三、ついに帰らぬ おもかげと

知ってはいても 夕焼の

門に出てみる 葉鶏頭

ああ

あの子が生きていたならば

城山小学校



現在残されている城山小学校被爆校舎

1923年に完成した城山国民学校は、当時としてはめずらしい鉄筋コンクリート3階建てでした。1937年に同じ鉄筋3階建ての校舎が増築されています。

1945年8月9日11時2分、1発の原子爆弾は全てを破壊しました。上空500メートルで炸裂した原子爆弾の爆風が、城山小学校の校舎に吹き下ろしました。

北側校舎の屋上には大きな穴があき火災を起こしました。校舎裏には大樹が茂っていましたが根こそぎたおれました。

校舎には三菱兵器製作所の給与課が移転してきていました。学校内には教職員、三菱兵器職員、学徒報国隊ら158人がいたが助かったのは20人にすぎませんでした。

現在残されている丸窓の建物は、北側校舎の階段棟でありました。爆心地の近くで残った唯一の公共建造物です。現在城山小学校平和祈念館として多くの人が訪れます。

平和祈念館

被爆当時の写真や資料を展示してあり、原爆のすさまじさを知ることができます。校舎自体が被爆遺構であるためとても貴重ですが、安全のためあらゆる所が補修されています。

校舎内部の壁を見るとコンクリートに覆われている内部の木が炭化しているのがわかります。直接熱線を浴びていませんが、原爆の熱があまりに高かったため、コンクリートの中で蒸し焼きになったものです。記念館内は写真撮影ができないので写真がないのが残念です。

城山小学校で被爆し亡くなった方々の遺影や名簿も展示されています。

かよこ 嘉代子桜

林嘉代子さんは、当時高等女学校の4年生で、城山小学校には三菱兵器工場の仕事のため出かけていきました。1945年、8月9日11時2分、松山町の上空に原子爆弾が投下されました。500メートルしか離れていない城山国民学校はものすごい熱線と爆風と放射能をまともに浴びました。あっという間に校舎は壊れ、中にいた人たちも吹き飛ばされたり校舎の下敷きになりました。

その夜、嘉代子さんのお母さんは一晩中玄関に腰掛けて嘉代子さんの帰りを待ちました。次の日嘉代子さんをさがしに出かけたお母さんは浦上方面の地獄のようなありさまを見て、娘が無事に生きているとは思えませんでした。それでも、もしかして・・・という思いで探して回りました。見つかりませんでした。2日目も見つかりません。3日目も4日目も……。でも、お母さんはあきらめませんでした。死体でもいいから家につれて帰りたいと、毎日毎日さがしつづけました。娘に似た死体は、口の中などを見て確認してまわりました。8月30日、嘉代子さんをさがしつづけて21日目あきらめきれないお母さんは、2回ほどさがして見つけることができなかった城山国民学校へやってきました。

校舎の中はまだ、骨が散らばっている状態でしたが、お母さんはそこで、嘉代子さんの防空ずきんのきれはしを見つけました。かけよってみると、そこに、防空ずきんのおかげで体の上の方だけ焼け残っている嘉代子さんをみつけました。やっとの思いで嘉代子さんを校庭まで運び、まわりにある木ぎれを集めて焼きました。あまりの悲しさに夜がふけるまで泣き続けました。お母さんは嘉代子さんの大好きだった桜の木を城山国民学校に植えさせてもらい亡くなった人たちの冥福を祈りました。それが「嘉代子桜」です。



現在の嘉代子桜

被爆したカラスザンショウ・クスノキ

城山小学校には、校舎だけでなく被爆した樹木もあります。

爆心地から500メートルしか離れていない城山小学校では木々も根こそぎ倒れ、焼けていたそうです。原爆のあとは70年草木も生えないという噂が流れましたが、その噂を覆すように木々に新芽が芽生えたといえます。木々の芽生えは被爆後の人々の生活に生きる希望を与えました。



カラスザンショウ



クスノキ

現在カラスザンショウは樹勢が衰えており、近くに茂るムクの木に支えられています。クスノキは2カ所あります。いずれも、原爆で根こそぎ倒れましたが、その後、そこから芽生え現在のように大きくなっています。

被爆柿の木



被爆者・諫山浩司さんは、戦後現在の若草町に移り住みましたが、そこには5本の被爆した柿の木がありました。被爆の傷跡が生々しいながらも、毎年たくさんの実をつけていました。しかし、樹勢の衰えが激しくなってきました。諫山さんは、「この柿の木だけは切ってはならない。」と言った父の言いつけを守り続けていました。柿の木の手術を決意し、大がかりな治療を行い、樹勢を回復させました。柿の木の2世もまた実をつけるまでになっています。被爆の証人としての柿の木を守り続けた諫山さんは、



被爆した柿の木



手術を受けた柿の木

長崎県教職員組合の執行委員や長崎県同和教育研究会の役員を長く務め、平和教育や平和運動、同和教育を広げることに大きな足跡を残されました。

長崎医科大学正門門柱

長崎大学医学部は、被爆当時、長崎医科大学という名前でした。爆心地から東に約600メートルの距離にあった長崎医科大学は全壊全焼しました。当時医科大学と附属医学部専門部は20名の教授を擁し、900名に及ぶ学生たちが非常災害発生時には救護要員としてただちに役立つよう教育されていました。原爆での死者は病院の勤務者を含めて892名。医療の中核の壊滅は被爆後の長崎の救護活動におおきな支障を生じさせました。

戦争中、医科大学以外の学生は学業の途中で学徒動員されましたが、医科大生だけは医師がたくさん必要なため、卒業するまで学校で勉強できました。しかし、ふつうは4年で卒業するところを3年で卒業するような制度がつくられ、ほとんどが軍医として出されました。そして、1943年、44年と戦争が激しくなるにつれ、日曜も夏休み、冬休みもなくなりました。3年生は爆心地から少し離れた付属病院で治療にあたっていたため助かった人もいましたが、1、2年生は大学で授業を受けていて、全員即死でした。座席に並んだ状態で骨だけになっていたそうです。

現在、医学部の中庭に白い三角すいの形をした慰霊塔があり、そばには犠牲者の名前を刻んだ石碑があります。

長崎医科大学の門柱は1.2メートル四方で、高さは約2.1メートル、約10度の傾きで前に最大9センチメートルずれています。人力では決して動かすことのできない門の姿に爆風のすさまじさを見ることができます。



によこどう 如己堂

平和祈念像から長崎市立山里小学校へ向かう途中、右手の坂道の左側に小さな木造の住居があります。この2畳一間の小さい家は永井隆博士と息子・誠一(まこと)さん、娘・茅乃(かやの)さんの3人が暮らしていた家です。永井博士は「己の如人を愛せよ」という基督教のことばを座右の銘にしていました。1948年の春、浦上の人々から贈られたこの家を、浦上の人々の心を忘れず、自分もその愛に生きようと「如己堂」と名付けました。

永井隆博士は長崎医科大学(現・長崎大学医学部)で放射線医学の研究と治療に励む中で放射線により被曝し、慢性骨髄性白血病にかかり、余命3年と診断されました。

そして、1945年8月9日午前11時2分、大学病院で被爆しました。自ら被爆しながらも大学病院で被爆者の治療にあたり、さらに8月12日から10月8日までの58日間、第11医療隊として長崎市三山町藤の尾に救護所を作り、医療材料が乏しい中で被爆者の治療を行いました。ついには白血病で倒れました。

しかし、病床から「ロザリオの鎖」「長崎の鐘」など数多くの本を出版し、原爆の恐ろしさと平和の尊さを訴え続け、1951年43歳の若さで亡くなりました。

如己堂と同じ敷地内にある永井隆記念館内には博士の遺品、書画、著書の他、博士に送られた手紙、写真などが展示されています。



乙女の像



美しい「乙女の像」

中国から贈られた美しい少女像で、まったく同じ像が北京にあり、二つの像はお互い向き合って存在しています。日中友好の象徴的なモニュメントとされています。特に原爆を落としたアメリカ(セントポール市・・・長崎の友好姉妹都市)から贈られた「地球星座のモニュメント」と共に、日本が侵略した中国から贈られた平和のモニュメントであることに意義があります。

像の後方には平和という意味の「和平」という文字が大書されています。しかし、1989年12月に、この像に赤ペンキがかけられ、大きな国際問題となりました。この心ないいたずらに心を痛めた長崎市民は「乙女の像を守る市民の会」をつくり、その事件以来10年間にわたり毎月第1日曜日に「乙女の像を守る市民集会」を開き続けました。その事は中国で大きな反響をよびました。

この乙女の像は平和公園のモニュメントの中では、唯一柵とセンサーによって守られています。この柵が取り払われるときこそ「平和公園」が「真の平和公園」になると言えるでしょう。

旧長崎刑務所浦上支所



平和公園内に残された長崎刑務所浦上支所の基礎部分

長崎市の平和公園には年間約200万人が訪れます。しかし、ここがかつて原爆によって全壊した長崎刑務所浦上支所であったことをどれだけの人が知っているのでしょうか。

1945年8月9日、支所とその周辺にあった官舎には、職員、家族、そして収容者の計134人がいました。11時2分、わずか南250メートルで原爆が炸裂し、一瞬にして全壊、全員の命が奪われました。

134人のうち、収容者は81人。この中には中国、朝鮮半島出身者が少なく見積もっても46人いました。強制連行の末に原爆の犠牲になった中国人や、容疑がはっきりしないままこの刑務所に送られ犠牲となった朝鮮人や韓国人などの存在も、のちに市民グループらの調べで明らかになりました。戦後、その遺族が遺骨の返還を求めましたが「合葬」された時点で骨の特定が不可能ということで、遺骨は祖国に帰ることもできませんでした。

平和公園には世界各国から贈られた平和を願うモニュメントがいくつも置かれています。その傍らで公園内に残された長崎刑務所浦上支所の基礎部分は、日本の加害と戦後補償の問題を訴え続けています。



観光客の目にほとんど触れることのない刑務所の壁

平和祈念像



平和祈念像は、長崎に原爆が落とされてから10年後の1955年、原爆「落下」中心地の北側にある平和公園内に設置されました。高さ9.7メートル、重量30トンの青銅製男子裸体像は、長崎県南有馬町出身の彫塑家北村西望によってつくられました。天を指す右手は原爆の脅威、水平に伸ばした左手は平和への希求、軽く閉じた目は原爆犠牲者の冥福を祈るとされています。毎年8月9日に、この平和祈念像の前で原爆犠牲者慰霊平和祈念式典が行われます。また、この祈念像の前で、毎月9日に欠かさず座り込みをして平和を訴える人々や、核実験が行われるたびに抗議の座り込みをする被爆者や市民もいます。

広島原爆ドームは原爆投下時のそのままの姿で「怒り」を象徴しています。長崎はそれに匹敵すると言われた浦上天主堂の廃墟を取り壊しました。そして旧長崎刑務所浦上支所のあった場所に美しい平和公園と平和祈念像をつくりました。毎年たくさんの観光客が訪れるようになりましたが、この場所で起きたことを胸に刻み、平和を希求する場所となりえているのかは疑問です。

垣田須磨子詩抄
ひとりごとへ一九五五年八月発表

何もかも いやになりました

原子野に屹立する巨大な平和像

それはいい それはいいけど

そのお金で 何とかならなかったかしら

“石の像は食えぬし腹の足しにならぬ”

さもしいといつて下さいますな

原爆後十年をぎりぎりに生きる

被災者の偽らぬ心境です

ああ 今年の私には気力がないのです
平和！ 平和！ もうききあきました
いくらどなって叫んだとて
深い空に消えてしまうような頼りなさ

何等の反応すら見出せぬ焦躁に
すっかり疲れてしまいました
ごらん 原子砲がそこに届いている

何もかもいやになりました

皆が騒げば騒ぐほど心は虚しい

今までは 焼け死んだ父さん母さん姉さんが

むごたらしくって可哀想で

泣いてばかりいたけど

今では幸福かも知れないと思う

生きる不幸と苦しさ

そんなことは知らないだけでも……

ああ こんなじゃいけないと

自分を鞭うつのだけ

平和の泉



『原爆で体を焼かれた人々が口々に「水、水を！」と叫びました。あたりにはきれいな水などなく、水たまりのどろ水しかありませんでした。私が困っていると防空壕から人が這い出してきた、欲しくて欲しくてたまらなかったのでしょう、どろ水をごくごく飲みました。そしてすぐに死にました。』被爆した少女の手記にこのような痛ましい光景が記されています。

被爆した多くの人々がこのように水をもとめて死んでいきました。平和の泉はこれらの霊に水を捧げ、冥福を祈るためにつくられました。直径18メートル、平和祈念像の前方に位置します。噴水は鳩と鶴の羽を象徴しているそうです。正面には「のどが乾いてたまりませんでした 水にはあぶらのようなものが一面に浮いていました どうしても水が欲しくて どうとうあぶらの浮いたまま飲みました」という水をもとめてさまよった少女の手記が刻まれています。

坂本国際墓地



広さは約8000平方メートルで、442ほどの外国人居留者の墓石があります。国籍は10カ国以上あり、中でもグラバー園で有名な英国人貿易商トーマス・グラバー夫妻と、その子である倉場富三郎夫妻の墓があります。また、永井隆博士とその妻、緑さんの墓も墓地の入り口付近にあります。爆心地も近く墓碑の多くが被爆し、その痕跡を今にとどめています。倉場富三郎の墓石と並んで上部が欠けた平たい墓石がたっています。刻まれている墓石名は、「ジョージ・スワットマン・マンスブリッジ」。アイルランド出身の船長だったマンスブリッジは、1884年、長崎で三菱造船所に就職、日本最初のサルベージ船の船長として沈没船などの引き上げに活躍しました。

後に日露戦争中に機雷の敷設に活躍したことが認められ、日本政府から勲章を授与されました。ですが、皮肉なことに自らの墓は西洋の別の兵器によって破壊されることになったのです。



永井隆博士の墓

白山墓地



爆心地近くにあるカトリック墓地のひとつで、爆心地近くの墓地だけに1945年(昭和20年)8月9日原爆死とか、8月9日死没などと記載された多くの墓碑を見つけることができます。中には当歳、二歳、三歳という幼児が原爆死していたり、一家五人、七人全滅といった悲惨な碑文を見ることができます。これら墓碑の記述から原爆が一般市民を無差別に殺傷した非人道的な兵器であることを知ることができます。これらの記述は墓地のいたるところで見つけることができます。また、原爆でキリスト教(カトリック)の信者が多く犠牲になったことも知ることができます。

白山墓地に限らずどんな墓地からも碑文の内容から戦争の歴史を知ることができます。

墓地は貴重な平和学習の場なのです。



一家六人が原爆の犠牲になった墓碑